

外国出身の母親の子育てに関する探索的調査

——保育園・幼稚園児をもつ母親の日本語使用を中心に——

重 田 美 咲

目 次

- はじめに
- 1. 「子育てのための日本語」の課題
- 2. 調査の概要
- 3. 結果と考察
 - 3.1 母親の日本語能力
 - 3.2 家庭における日本語使用
 - 3.3 園に関する日本語使用
 - 3.4 外国出身の母親のニーズ
- 4. カリキュラムデザインに向けて
おわりに

はじめに

厚生労働省によると、2013年には約2万5千人の日本人が国際結婚をしており、そのうち妻が外国籍の場合は夫が外国籍の場合と比べると大幅に多く、73%を占めている¹⁾。「イクメン」などという言葉も広がってはいるが、日本においては、未だ父親より母親の子育ての負担が大きいのが一般的である。殊に、母親が外国出身である場合の子育ての負担の大きさは尚更であろう。

本稿では、子どもにとって、また、母親として、最初に体験する教育機関であること、発達段階からして親の関与が多く求められる時期であることから、幼稚園・保育園に通う子どもをもつ外国出身の母親を対象に、日本での子育てに何が必要か、日本語使用を中心に探索的調査を行った。

1. 「子育てのための日本語」の課題

佐野(2009)は「目的別日本語教育(Japanese for Specific Purpose、以下JSP)」の特徴を「学習者に特定のニーズが存在すること」とし、そのニーズの例として、「電子工学分野の論文を読む技能、化学分野の修士論文を作成する技能、文化人類学研

究の一環として北海道の漁師にインタビューを行う技能、小学校からのお知らせを理解する技能、機内サービスや介護現場での日本語運用技能」を挙げている。また、「外国人主婦がまず、家庭内コミュニケーションに必要な身近な語彙や方言の習得から日本語学習を始め、徐々に社会生活に必要な全般的日本語能力習得に向かうのも、JSPに特徴的なアプローチである」としている。これまで、JSPの研究と言えば、留学生の専攻別、技能別の研究、または、職業別の研究が中心であり、外国出身の母親のニーズがJSPという位置付けで研究されることはなかった。また、近年、生活者のための日本語教育研究も活発に行われてきてはいるが、外国出身の母親の日本における子育てに関する研究は非常に少ない。富谷他(2009)、富谷他(2012)、内海・澤(2013)等において、外国出身の母親の子育てに関する事例研究、実態調査が行われ、連絡帳に関する研究や外国出身の母親の日本語の自然習得に関する研究がなされているが、必要な語彙や表現、外国出身の母親が学習すべき項目に関しては未だ明白ではない。それに加え、これらの研究が行われた地域は、大都市、または、外国人女性とのお見合い結婚の事例が多い農山村における研究であり、日本で大多数を占める外国人人口の少ない地方都市への汎用性についても検討の余地が残る。

2. 調査の概要

調査は、2013年3月～4月に、山口県下関市(人口約27万人、外国人人口約2,000人)において行った²⁾。調査協力者は6名であった。外国出身で保育園児、幼稚園児をもつ母親を広く募ったが、結果として、6名とも日本語母語話者である男性を夫にもつ国際結婚であった。調査協力者の日本での生活歴は5年～17年で、出身国の内訳は、中国2人、

韓国2人、米国1人、フィリピン1人であった。子どもに関していえば、2013年度に子どもが年中になる母親が2名、子どもが年長になる母親が4名で、保育園に子どもを通わせている母親、幼稚園に子どもを通わせている母親、ともに3名ずつであった。

それぞれの調査協力者に対し半構造化インタビューを行った。面接は、日本語で行い、調査協力者が理解できない時には、日本語での言い換えや調査協力者の母語を用いた。面接は、日常生活における日本語使用場面や困難な点に関する質問を中心に行った。その中で、園のお便りを見せて日本語の理解度を測ることや、園の先生との接触場面のロール・プレイ等も行った。また、調査協力者全員が国際結婚であったため、夫と妻の役割分担に関する質問することで非母語話者にとって困難な日本語使用場面を抽出することを試みた。

面接時間は一人につき2時間～3時間半であった。面接の内容は文字化し、佐藤（2008）をもとに分析を行った。

3. 結果と考察

3.1 母親の日本語能力

まず、調査協力者の日本語能力の概要について述べる。

調査協力者のうち3名は日本語で子育てを行っており、母語を用いることは殆どないと言う。他の3名は子どものバイリンガル教育も視野に入れ、子どもに対しては母語を積極的に用いている。

3名（日本語学習歴あり2名、自然習得1名）はフォリナー・トークを用いることもなく面接が可能であり、日本語の誤用も殆ど見られなかった。2名（2名とも自然習得）は、日本語の誤用は多少見られたが、話す速度をやや落とすことで日本語での面接が可能であった。この2名には、方言の使用も多く見られた。1名（日本語学習歴あり）に関しては、フォリナー・トークといくつかの語彙を調査協力者の母語で言い換えることで日本語での面接が可能であった。調査協力者6名全てが日本で日常生活を送る上で最低限必要な口頭運用能力以上は身につけていると判断できた。

次に、園のお便りを見せたところ、3名が「わか

る」、1名が「大体わかる」と答え、非漢字圏出身の2名が「主に夫が読む」、「自信がない、夫に確認する」と答えた。しかし、この2名も行事予定表や給食の献立表は比較的わかりやすいと述べた。園からのお便りを読むことに関しては、やはり、非漢字圏出身の母親には難易度が高いことが窺える。また、富谷他（2009）では、日本人男性と結婚したアジア人女性の読み書き能力について、自然習得には限界があることが指摘されているが、本調査では2名の漢字圏出身の母親が、教室での日本語学習経験がないにもかかわらずお便りが読めるという結果が出ており、漢字圏出身の母親のお便りの読みに関しては、自然習得の限界に当てはまらない可能性も示唆できる。

書くことに関しては、日本語能力試験一級に合格している調査協力者も含め、全ての調査協力者が「自信がない」と述べた。日本で子育てをする母親にとって四技能のうち最も苦手意識の強いことは、「書くこと」だということが明らかになった。

更に、注目すべき点として、日本語能力試験一級に合格している母親も含め、全ての母親が子育てをしていて自分の日本語能力は十分ではないと感じていた。このことから、「子育ての日本語」が「一般日本語（Japanese for General Purpose）」とは異なることが指摘できよう。

以下、子育てで求められる日本語とはどのようなものなのか、具体的に分析していく。

3.2 家庭における日本語使用

家庭での子どもに対する日本語使用の難しい点として、絵本の読み聞かせを4名が挙げた。日本語を読むこと自体に難しさを感じる母親もいるが、むしろ、絵本に含まれる日本固有の文化的、歴史的な背景が難しいようだ。昔話には、現在では見る機会の少ない道具なども出てくる。オノマトペが頻出する絵本もあり、ある母親は『おおきなかぶ』で繰り返し使用される「うんとこしょ、どっこいしょ」の発音の間違いを子どもに指摘されたという例を挙げた。また、上級の日本語能力をもつ母親からは、「平仮名ばかりだから、どこで切ればいいのかかわからず逆に読みにくい」との指摘もあった。1名の母親は、自分が絵本を流暢な日本語で読めないことを「母親失格だと思った」と語った。

日本の童謡に関して知らなくて困ったという話が3名により挙げられた。1名は知らないことに負い目を感じ、1名は日本の童謡のCDを買って対処し、1名は子どもに教えてもらうというスタンスをとることにしたという。

その他、恐竜の名前、アニメのキャラクターの名前、幼児語、子どもを叱る時の日本語が子育てにおいて困難な日本語として挙げられた。

子どもによって興味を持つものは異なる。今回の調査でも、子どもが興味を持っているものとして、恐竜、乗り物等が挙げられ、ある母親は、カタカナばかりの恐竜の名前に難しさを感じていた。恐竜や乗り物に関する語は、考古学や工学を専門とする留学生のための専門日本語として分類される可能性も高くなく、生活者のための日本語としても分類されにくいという盲点がある。しかし、子どもが興味を持てば、母親にとってそれは生活のために、子育てのために必要な日本語になり得る。子どもが図鑑などを見ても、文字が認識できない時期には尚更である。

子ども向けのテレビやアニメのキャラクターに関しても同様のことが言える。日本のアニメは世界に進出しているが、地域によって、時期によって、自分の国では見ることのなかったアニメも日本では放送されている。ある母親は、子どもが園で覚えて帰った「アンパンマン」という語が何を指すのか見当もつかなかったという例を挙げた。今回の調査でも、子どもが興味を持っているものとして、「アンパンマン」、「戦隊モノ」、「ウルトラマン」、「仮面ライダー」、「プリキュア」等が挙げられた。前述の母親は夫に聞くことによって「アンパンマン」が何なのか理解できたそうだが、このようなキャラクターの名前は一般的な日本語の辞書では見つけることができない。また、これらは、新シリーズが始まったり、新しい登場人物が出てきたりして、変化が目まぐるしいうえ、カタカナ表記のものも多い。そして、これらの用語は専門用語として捉えられることもなく、生活者の日本語としても取り上げられる可能性は低い。しかし、子供用品で非常に多く目にするキャラクターもあり、また、園での子ども同士の会話の中でも話題に上りやすいため、番組のタイトルや主人公の名前、おおよその設定ぐらいは母親にとっても知っておくと有用であると言えよう。

幼児語では、「あんよ（足）」や子どもに対して使われやすい「～なさい」といった語や文型だけではなく、「痛い、痛い、飛んで行け。」のような日本ではよく子どもに対して使われる表現も挙げられた。更に、ある母親は子どもが夫に「しっ、しっ。（「あっちに行け」の意）」と言ったのを夫がきつく叱った理由がわからなかったという。夫の説明により、その言葉が目上の人間に使われるべきものではないということを知ったと語った。この母親は日本語能力も非常に高く、日本語の学習経験も十分にあるが、「子どもの言葉は教えてもらっていない」、「（大人の）私にそういう言葉を使ってくれる人はいない」、「初めて聞いた」と述べた。

また、「子どもを叱るときの日本語が難しい」と2名の母親が語った。1名は叱る表現を日本語で多く知らなかったため、つい、何かと「バカ」という表現ですませていたが、ある日、知人から、「バカ」という言葉は子どもが傷つくので使ってはいけない言葉だと指摘され、自分が認識していた以上に「バカ」という言葉が悪い意味を持つ言葉だと気付いたという。もう一人の母親は、母語では日本語よりも直接的な叱り方をするため、日本風の婉曲的な叱り方ができず、それによる子どもへの影響を心配していた。大人になって来日した母親自身は、子どもとして大人に日本語で叱られる経験は全くもたず、また、日本では人前で子どもを叱るのを憚る傾向にあるため、外国出身の母親が叱るための日本語や日本風の婉曲的な叱り方に触れる機会は極めて少なく、叱るための日本語というのは自然習得が非常に困難な項目の一つであると考えられる。

それに加え、「自分が日本語母語話者でないため、極力、夫の役割としていること」として、6名中5名が子どもを病院へ連れて行くことを挙げた。まず、問診票を書くことが難しいという。都市部では翻訳版の問診票が普及していることもあるが、特に地方においては各病院に各国語版訳の問診票が配備されていることは余程特殊な場合を除いてはない。医療機関で各国語版問診票を配置することや外国出身の母親が常に各国語版問診票を持参できる状態にあることが望ましいと考えられる。更に、これまでかかった病気の名前を尋ねると、漢字圏、非漢字圏に関わらず、名前が思い出せない病名や病名の誤用はごく僅かであり、6名中4名が、水疱瘡、喘

息、痙攣、インフルエンザ、プール熱、溶連菌といった一般日本語の教材では出てこない用語を即座に並べた。子どもが一度かかった病名は習得しやすいようだ。しかしながら、初めて医師の口から聞く病気の話はわからないことが多く、ある母親は、自分一人で子どもを病院に連れて行かなければならなくなった場合は、持ち帰って日本語母語話者の夫に見せるために病名などを書いてもらうと話していた。予防接種に関しても、予防接種名の誤用は極めて少なく、日本脳炎、麻疹、風疹、BCG、Hibなどが即座に挙げられた。ただ、予防接種の時期の管理については、自分一人で完全にできていると答えたのは漢字圏出身の1名のみで、他の母親は、夫、かかりつけの小児科、市の「子育て相談」の助言を受けていた。更に、それぞれの予防接種が母国語で何を指すのかは調べるにより理解できるが、母国では接種が定められていて日本では接種が定められていないものはそれを接種すべきかどうか悩むという意見も聞かれた。

3.3 園に関する日本語使用

自分の日本語が十分でないと感じる場面として、4名の母親が園の先生との会話を挙げた。調査において、朝夕、園の先生に会った時のロール・プレイも行って見たが、全員こなすことができた。しかしながら、前述の叱り方と同様、園の先生方が保護者に言いにくいことを伝える時（子どもがした悪いことについての報告、子どもが怪我をしたことについての説明、等）に使う日本語も婉曲的であることが多い。それが日本語非母語話者である母親達の日本語の理解を難しくしている。逆に、園に対して苦情等を述べる際も日本語では直接的な表現を避ける傾向にある。全ての調査協力者は自分の意思を伝えるだけの日本語口頭運用能力をもっているが、日本では婉曲的な言い方が望ましいと知っているため、更には、先生の気分を極力害したくない、先生とは良好な関係を築きたいと意識するため、外国語である日本語での園の先生との会話は難しく感じるようだ。実際に6名中4名が苦情をはじめとする園への連絡を夫の役割としていた。

また、内海・澤（2013）でも、外国出身の母親達が連絡帳を書くことに苦手意識を持っていることが示されているが、本調査でも、連絡帳、そして、園

からの各種書類への記入に母親達が苦手意識を持っていることが明らかになった。6名中4名が連絡帳のある園に通っていたが、4名全ての母親が連絡帳を書くのは夫の役割としていた。余程複雑な話でない限り、全ての母親が必要なことを日本語で書いて伝えられるレベルにあると判断できたが、漢字が苦手、きれいな字で書きたい、間違えずに書きたいといった希望があるがゆえに、書くことに躊躇していた。ある母親は、連絡帳に書きたいことは母親と父親で少し差があり、自分が連絡帳に書いてほしいと提案したことと夫が書いてくれたことが多少異なることもあると話した。

その他に、自分の日本語が十分でないと感じる場面として、「メール」も挙げられたが、これも「書くこと」の一種だと言える。メールに関しては、6名中3名が携帯メールを日本語で殆ど使用していなかった。また、同じ園の日本人の母親とメールのやりとりがあるのは、6名中2名だけであった。うち1名は、メールはもらうが、返事は主に電話ですると答えた。

漢字による表記に関していえば、特に非漢字圏出身の母親への負担は大きい。園のお便りや園の貼り紙による伝達などがそうである。重要な伝達事項を張り紙でする園も複数あった。ある母親は、お便りにふりがなをつけてほしいと言い、ある母親はお便りや張り紙の情報を電子化することを希望として挙げた。電子化すれば、翻訳サイトを用いることで内容を今より容易に理解できるようになるだろう。

それに加え、月曜日に園に持って行く物を問うことにより園での生活に必要な用具に関して調査協力者の使用語彙の確認を行ったところ、全員がおしぼり、手拭き、上靴、遊び着といった一般日本語教育では現れにくい語をすぐに並べた。しかしながら、それでも、かつて、わからなくて困った日本語として、上靴、布団カバー、タイツ、イチゴバック（工作に使うイチゴの入っていたプラスチック容器）が挙げられた。その他、「水筒」と言われて首に掛けられる紐がついている物をイメージできなかったという話、園児が冬でも半ズボンや短いスカートを着用しなければならないことに驚いたという話、「日本風のきれいなお弁当」や「キャラ弁」を作らなければならないと弁当作りを負担に感じたという話も聞かれた。

更に、行事に関する日本語の定着を知るため、園ではどのような行事があるか尋ねたところ、運動会、参観日、遠足、バザー、発表会、お遊戯会、クリスマス会、餅つき、総会、プール出し、プール片付け、親子広場、祝福式といった語が全ての母親から誤用もなく即座に出された。しかしながら、ある母親は、運動会、バザー、夏祭りといった行事は母国ではなく、何をするのか最初全く分からなかったと語り、運動会の時、お弁当をグラウンドで食べるという習慣を知らず、うちに帰って昼食をすませて運動会に戻って笑われたという話をした。園側も日本ではあまりに一般的すぎて、外国の母親にそこまで情報を提示しなければならないという視点が欠けていたのであろう。また、これらの行事の中にはプール出し、プール片付け、親子広場等、園独自のものもある。更には、今回の調査でも6名中2名が自身の宗教により園を選んでおり、クリスマス会や祝福式という行事も挙げられたが、特に私立の場合、教会や寺を母体とする園も多く、園によっては宗教に関連する用語も必要となってくる事がわかる。

園で日本語がわからない場合の戦略としては、周りの人や先生に聞く、家に帰って夫に聞く、家に帰って調べる、先生から夫に電話で直接説明してもらおう頼む、持参した辞書で調べるといったものが挙げられた。一方、園側の対応としては、言い換える、実物を見せる、書く（漢字圏出身の母親のため漢字で。持ち帰って日本語母語話者である夫に見せればわかるように。）、日本語母語話者である夫のほうに連絡するといった戦略が見られた。

3.4 外国出身の母親のニーズ

現時点で習いたい子育てに関する日本語を尋ねたところ、2名が書くことを挙げた。また、自然習得の2名は「きれいな」日本語、「正しい」日本語を学び直したいと語った。その他、ママ友との会話、漢字の読み方、文章を読むこと、書くこと等が挙げられた。「日本語を習うより日本人の友達がほしい」という意見もあった。ある母親は外国出身の母親のための日本語教室の必要性を主張したが、その一方で、子育てに忙しく日本語を勉強するのは時間的に無理だという意見、日本語を勉強しに行こうに

もその間子どもの世話はどうすればいいのかという意見、更には、車の運転ができないので行きにくいという地方都市ならではの意見も複数あったことから、外国出身の母親向けの日本語教育にはEラーニング等の自学しやすい工夫や子連れでも参加できる教室の開設が必要であることがわかる。

今ほしい子育ての情報としては、4名が小学校を挙げ、2名がお稽古事を挙げた。その他、小学校に加え中学校、日本語クラス、運転免許の取り方（子どもの体調不良時や子どもの送迎のために）、子どもの送迎サービスが挙げられた。子育てに関する情報源を尋ねると、6名中3名が日本人である夫を挙げており、夫が妻に代わってインターネット等で調べる場合が多かったが、小学校やお稽古事といった情報は一般に公開されている情報は表面的である。また、日本では父親同士が交流して子育て情報を得るような機会は少ない。母親達が知りたいのは、学校の場合、学校や教員の評判、PTAの役員はどの役の負担が軽いのか等、インターネット等では公開されにくい情報であることが多い。お稽古事の場合も同様に先生や教室の評判が中心である。一般的に、このような情報は、母親が先に小学校やお稽古事に行かせている母親から会話の中で得られるようなものである。実際、今回の調査を機に、調査者が調査協力者に提供した子育てに関する情報は、各国語版問診票、学校やお稽古事の情報、負担軽減の方法（ファミリー・サポート・センターや託児所の情報、雑巾は100円ショップで買えること、手作りしなければならないとされる手提げかばん等の園で使用する用品は手芸店に依頼して作ってもらうことができること）であった。調査協力者の中で日本人の母親との交流が頻繁にあるのは6名中3名であったが、日本人の母親とのコミュニケーションや母親の人的ネットワークの育成までを視野に入れた日本語教育が必要であると考えられる。

4. カリキュラムデザインに向けて

今回の調査で、保育園児、幼稚園児を持つ外国出身の母親に求められる日本語学習項目として、園の先生に対する婉曲的な表現、園生活のための読み書き、絵本、童謡、幼児語、子どもの興味に関する語彙（恐竜、乗り物等）、子ども向けテレビ番組に関

する語彙、病院の日本語（予防接種を含む）、メールの日本語、園の行事に関する語彙、園に必要な用具に関する語彙、園生活で頻出する漢字、ママ友との会話が抽出できた。これらの殆どは、一般日本語教育には含まれておらず、子育てのための日本語の特殊性とその概要が明らかになったと言える。今回の調査協力者は夫が日本語母語話者であり、母親が非母語話者であるため困難な時は、夫が代わりに役割を果たす場合も多く見られたが、非母語話者同士のカップルが日本で子育てをする場合、上記の項目の学習はより重要になってくるであろう。また、配偶者が日本語母語話者である場合においても、上述の語彙、表現を増やし、日本語能力を高めることにより、より自分らしい子育てが実現できると考えられる。

園生活で頻出する漢字、園生活のための読み書き（お便りの読解、連絡帳の記入、各種書類の記入等）、ママ友との会話やメールに関しては更に詳細な調査、研究を行った上での教材作成が急がれる。

また、園の先生との会話における婉曲的な表現や子どもを叱る表現などは、多様なケースがある上、正解が明確なものでもないため、日本語の学習だけでなく、文化的な背景を理解すること、更には保護者自身の個性が尊重される表現が求められる。日本語の学習だけでなく、子育てについて相談できる場として機能する日本語教室が子育て中の母親には必要である。

子どもの興味に関する語彙や子ども向けテレビ番組に関する語彙については、全ての語彙を網羅する必要があるとは言えないが、そのように情報交換の場としても機能する日本語教室においてトピックとして取り上げられる中で、自分の子どもに必要な語彙や知識が習得できればよいのではないかと考えられる。

また、園生活に関する語彙（用具名や行事名等）は比較的自然習得が容易であるが、1年目は非常に困難であることから、入園前の母親を対象とした日本語指導が有効であると考えられる。

更に、外国出身の母親が難しいとした絵本の読み聞かせや童謡に関しては、日本、外国出身といった出身地に関係なく、また、日本語に限らず、親と子が共に絵本の読み聞かせや、童謡を歌うことができるような場が設けられれば、日本人の親にとって

も、外国出身の親にとっても、有益な場となり得るであろう。このような場は人的ネットワークの育成の場ともなり、外国出身の母親も子育てに関する情報を得やすくなるであろう。

おわりに

本調査では、外国出身の母親が日本での子育てに何を必要としているのか、日本語使用を中心に分析し、どのように日本語を学ばよいか、その可能性を提言した。しかしながら、外国出身の母親が日本語の習得に努めるだけでよいという問題ではない。医療機関に各国語版の問診票が配備されたり、地方自治体が各国語で情報を発信したり、園が連絡事項を電子化したりするといった外国出身の母親の子育てに配慮した環境の整備も必要である。また、Lave and Wenger (1991) の状況的学習理論に基づけば、外国出身の母親の「学習」には「共同体」である園や地域の人々とのインターアクションが不可欠となる。ある母親は、これからは、地方都市においても、日本人以外もこの地域に住んでいることを教育していくことが必要だと語った。更に、外国出身の母親の中には学校等の教育機関に行って自国の文化の紹介等をしてほしいという母親もいると話した。地方都市において、留学生が小学校等で自国の文化を紹介するような活動は少なからず見られるが、外国出身の母親を招いて学ぶという実践は少ない。地域に長期間在住している外国出身の保護者の話を聞く機会が実現すれば、日本人の子ども達や保護者、教員、そして、その活動を行った外国出身の母親にとっても、その子どもにとっても、有益な「学習」の機会となるであろう。本調査では、婉曲表現の難しさや書き言葉の不完全さから、園の先生への苦情や連絡帳への記入を遂行する能力があるにも関わらず夫の役割とする母親達の姿も明らかになった。また、外国出身の母親達からは、「(日本の童謡を知らないのは) 母親失格だ」、「きれいな日本語で話せるようになりたい」という発言もあったが、周囲が外国出身の母親の日本語を受け入れ、外国出身の母親が日本語を間違えることをためらわない環境、日本語ができないこと、日本の文化を知らないことで「母親失格だ」と感じることを決してない環境を作り上げていくことが重要である。

今後の課題としては、園生活で頻出する漢字、園生活のための読み書き（お便りの読解、連絡帳の記入、各種書類の記入等）に関する調査をさらに進め、日本で子育てをする外国出身の母親のための日本語教材の作成に努めてきたい。

注

- 1) 厚生労働省「平成 25 年我が国の人口動態（平成 23 年までの動向）」より
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/81-1a.html>
- 2) 下関市公式ホームページより
<http://www.city.shimonoseki.lg.jp>

参考文献

- ・植田都（1995）「日本の幼稚園における外国人園児の親に関する研究」『聖和大学論集教育学系』23号, pp.289-301.
- ・内海由美子（2009）「外国人散在地域における配偶者の日本語学習支援を考える」『日本語学』28-6, pp.88-96.
- ・内海由美子・澤恩嬉（2013）「外国人の母親に対する読み書き能力支援としてのエンパワーメントー幼稚園・保育園と連携した主体的子育てを目指してー」

『日本語教育』155号, pp.51-65.

- ・佐野ひろみ（2009）「目的別日本語教育再考」『専門日本語教育研究』第11号, pp.9-14.
- ・佐藤郁也（2008）『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社
- ・猿橋順子（2009）「国際結婚外国人女性の支援を考えるー言語管理とエンパワーメントの視点から」河原俊昭・岡戸浩子編『国際結婚ー多言語化する家族とアイデンティティーー』pp.37-73, 明石書店
- ・富谷玲子・内海由美子・斎藤祐美（2009）「結婚移住女性の言語生活ー自然習得による日本語能力の実態分析ー」『多言語多文化ー実践と研究』2号, pp.116-137.
- ・富谷玲子・内海由美子・仁科浩美（2012）「子育て場面で外国人保護者が直面する書き言葉の課題ー保育園・幼稚園児の保護者を対象とした調査からー」『神奈川大学言語研究』34号, pp.53-71.
- ・J. Lave・E. Wenger（1991）『Situating Learning - Legitimate Peripheral Participation-』Cambridge University Press

謝辞

お忙しい中、調査に協力して下さったお母さん方とその家族の方々に心から感謝の意を表します。